

「英国のEU離脱ショック」

頭取 高橋 祥二郎



だと思っています。

つまり、起こったことは今さら何とも致し方ないですが、ここに至った経緯を、日本としても日本の実情にも照らし合わせ、ともに「抱えている課題」として考え、今後に生かす「したたかさ」が必要です。英国がEU離脱に至った要因や課題として、私なりに次の3点を考えてみました。

① グローバリズム(G)とナショナリズム(N)

日本でも、英国と同じく「グローバル化」や「グローバルスタンダード」という言葉が金科玉条の如く使われることに抵抗感を持つ人が多いのが実情です。このような中で、日本は、その歴史や文化、日本人の資質について、胸を張って世界に発信して初めて真の「グローバル化」が実現する

と考えます。つまり、ボーダレス化の一層の進展に、「グローバリズム」と「ナショナリズム」を安易に対立させるのではなく、バランスを取ることが今こそ大切、と考えます。

② 世代間意識の格差

国民投票の結果、英国国内の「世代間意識の格差」がはっきり出たことに私は少なからずショックを受けました。

わが国は、と見れば、少子高齢化や東京一極集中、年金問題など課題が山積しており、すでに英国以上の「世代間意識の格差」が生じていても不思議ではありません。と同時に、私たちは「次世代の将来」について危機意識をもって考え、具体的、速やかに手立てを実行しなければ未来はないと痛感した次第です。

③ 代議制と国民投票(直接選挙)

「国民投票」は人々が直接民主主義を実感できる重要なプロセスです。しかし、英国の選挙後の混乱を見れば、投票前に、テーマについての正確な情報を国民に提供しておくこと、そして何よりもムードに流されないだけの「政治に対する意識」の高まりが前提であることを強く感じました。

今回の英国の「国民投票」結果による混乱は今後、終息に向かうのか、あるいは混乱にさらなる拍車がかかるのか。まさに過去を検証し、未来を創造する、私たち人類の「英知」が試される時、と思います。

事前予想が二転三転する中、世界に大きな衝撃と混乱を招く出来事が英国で6月23日、現実となりました。国民投票の結果、「EU離脱」が多数を占めたのです。予想はしても「起こって欲しくないことは起こらない」と楽観的、希望的に考えてしまう人間本来の「弱さ」を露呈したのかもしれないかもしれません。ことの性質上、投票結果はすぐさま实体经济に影響する筋合いではないのかもしれませんが、実際は金融市場が大きく反応し、為替や株価が今に至っても乱高下を繰り返しています。日本から見ると、遠く離れた欧州での出来事ながら、「抱えている課題」は共通しているように思えます。そして、欧米や日本がどう課題に向き合うべきかを考えさせられる象徴的な出来事